

## いまだからこそ、異文化に触れるということ

京都大学文学部 2 回生 佐々木伸康

地理的に比較的近く、日本との繋がりが非常に強いとは聞いていたがその実は何も知らない。東南アジアの国々はどうのようなところなのだろうか。私がこのプログラムに参加した最大の動機は興味と好奇心だった。

憶測とイメージで作られた私のインドネシアに対するイメージは入国した瞬間に崩れ去った。綺麗に整備された空港や幹線道路。ネオンで輝く高層ビル群。自分の無知を恥ずべきだが正直なところ、首都ジャカルタとはいえども未だに発展途上だと思っていた。このように、2週間程度の滞在を通じて驚きと発見の連続であった。

プログラム期間中は主に、午前中はインドネシア語の授業を受け、午後はインドネシアの伝統文化の体験やインドネシア大学の日本語学科の学生と行うプレゼンテーションの準備などを行った。また休日にはジャカルタに出かけ歴史的街並みの見学や観光を楽しむことができた。大学内で授業を受けるだけでなく、街並みや歴史、文化を実際の生活の中で味わうことができた点は大変意義深かった。授業で習ったインドネシア語を店等で実際に使う機会があったこともよい経験になった。

日本語学科の学生は滞在中あらゆることの手助けをしてくれて大変親切だった。おかげで思わず外国に滞在していることを忘れるほど現地に馴染むことができた。時折言葉の壁を感じることもあったが、英語を交えたり易しい日本語で言い直したりと工夫してコミュニケーションを取ることを意識した。

2週間程度のインドネシアでの滞在を通じて実感したことは、自分の体で直接異文化を体感することの重要性である。性格や考え方、ライフスタイルなどの違いを感じることもあったが、根底では通じ合っている点も多いと感じた。異質なものを理解することは容易ではないが、異文化の中に身を据え直接交流することはそのために欠かせないことの一つだと思う。今回は2週間と短い滞在だったので、数ヶ月から1年程度の留学に挑戦したいという気持ちが高まった。

また自分自身の学習に関して、インドネシアについてさらに学習を深めたいと考えるようになった。とりわけインドネシアの現代史や宗教的多様性、食文化について関心を持った。私の専攻である現代史と関連させて、インドネシアについての学習および研究を日本においても続けていきたいと考えている。学部卒業後に海外で勉学をすることの重要性についても考えるようになった。

最後に、この滞在は私の世界の見方を変えた。帰国してすぐに眺めた、均整の取れた建物と港町の風景。見慣れたはずの景色なのになんとなくいつもと違って見える。インドネシアでの学びを通して自分自身のものの見方が相対化されていたようだ。いつもの生活の良い所も悪い所も自然と見えるようになった。驚きと発見の毎日。そのうち日本の暮らしにも慣れるはずだが、今は新鮮な毎日を楽しんでいる。